

山岳技術研究会を考える

個人的見地から

—— 藤 原 聰 ——

現在の日本の山に於て、最近探検を云々するのは、あまりにも時代錯誤的な考えであろうか。夏の北アルプス等に於ては、人は列をなして歩き回り、その混雑ぶりは都会のそれと何ら変わりがないように見える。夏だけではない。積雪期においても又、残雪期においても、むろん入山する者の絶対数は異なるが、その混雑ぶりには何ら変わることはないようである。日本においては、登山というものがあまりにも普及すぎた。それは手に入れようと思えば、だれにでもすぐにヒマラヤ級の装備を入手することができるというところにも表われているのではないか。とも角、あまりにも一般的なことになってしまったために、人は山というものについて深く考えず、野球をし、又はテニスをするようなつもりで、どんどん山に入る。すなわち登山というものが道なるスポーツとなってしまうということである。ところが山に入る人が全て、そんな考えでいるということは決してないのである。

我々のいうところの（探検的山行）というものをやっている山岳部、山岳会は世に多くある。

彼らは、穂高を又は剣を開拓していった初期の岳人たちの意志を受けつぎ日本の山に、そして世界の山にその情熱の炎を燃やし続けているのである。そして我々山岳技術研究会もそんな団体、又は個人の一員であると自負し山を考え、山に悩んでいるのである。

現在我々の行っている活動は大きく分けて探検的山行と、トレーニング的山行の二つに分けることができるであろう。山岳において、より困難な活動を行なおうとすればするほど、より高度な特殊の技術そして体力、又はそれにうちかつための精神力が必要になる。そしてこれらすべての要素は、実際に山に入って徐々に身につけていかなければならないのである。

そのために我々は、春に、夏に、そして、秋、冬に四季を通じて山に入りより多くの環境においてトレーニングを行なっている。

だが、大学の4年間というものは、このトレーニングだけを行なうにしてもあまりにも短かすぎる。わずか4年間では、本当の山を知り我々の考える本当の山行を行なうのは無理なのではないか、というのが本心である。

しかしながらこの大学生活4年間を全くトレーニングに明け暮れしようなどは、毛頭考えてはいない。そこで将来に夢を拓し、又一方では自分達の実力に対応した探検的山行というものを行っているのである。

以上が技研というものの独自の姿をある程度客観的に見たものである。そこで次に現在の探検部における技研というものを、私なりに感じていることを述べることにする。現在我が部は技研を含めて5つのパートに分かれている。

そしてはっきりと5つのパートに分かれて現在

に至るまで、その長所短所はだんだんとよりはっきりした形で表われてきた。

そして現在においては、前のフィリピン遠征を契機として、さらに「新たなるパート」が生まれて来た。このことに関しては各個人、種々の考えがあろうと思うが、私には自然のなりゆき、というより必然的な結果と思える。

ところが技研のメンバーの内には、そのような「新たなるパート」に加わろうとする人間がいるだろうか？ 上のように書けば誤解される恐れもあるが、要するにその必然的な流れというものを顧みず、というより気にはしていながら、その可能性を見出し得ず、技研というものを固守するような結果になってしまっているのではないのだろうか、ということである。

そして現在あまりにも一般化したように思われている山というものを対象としている我々技研というものが、部の他のメンバーに余り理解されず、孤立化の一途をたどっていつているような不安にかられるのである。

すなわち、現在我々にとって、部内における技

研というものの一つの転換期（というよりはむしろ再認識する時）に来ているということを知らなければならぬのではないか。

現在の我々はあまりにも忙しすぎる。（中には暇をもてあましてる者もいるかも知れないが……）

新学期が始まると半日もしない内に五月山合宿、そして2ヵ月もすると夏山合宿。

そして秋山、冬山、最後に春山。普段の日の日曜といえども無駄にせず、せっせとトレーニングに出かける。というより、そうせずにはいられない。冬の西穂山稜、春の利尻を思う時、その必要性をひしひしと感ずるからだ。おかげで年間山行日数百日を下らないものも出てくる。

このようなことを言訳の積りにしようとは思わないが、次々と計画に追われている内に、考える方がおろそかになる。これではだめだ。探検的山行というものは、簡単には得られない。

我々はもっと己に厳しくならなければならない。そしてその上に立って技研の方向性というものを、認識していかなければならないのではないだろうか。

ふじわら・さとし（工学部学生）

